

登校拒否児と非行児の学校生活に対する 意識と態度の関連性

福 屋 武 人

The Relationship between Attitudes and Consciousness of School Refusal and Delinquent Children toward School Life

Taketo FUKUYA

はじめに

わが国の青少年の問題として近年では登校拒否と非行が社会問題となっている。いずれもここ数年の間に急速の増加を示し、さらに弱年令化傾向を示している点で注目されている。

登校拒否に関しては、1992年の文部省の「生徒指導上の諸問題現状」調査によれば1990年(平成2年)では小学生の登校拒否児童数8014名で、5年前の1985年(昭和60年)の4071名に対して約2倍の急増であり、同じく中学生では1990年に40,223名で1985年の27,926名に対して約1.5倍の急増ぶりを示している。中学生の登校拒否は70年代後半からほぼ毎年10%以上の増加を続け、最近に至ってその上昇率がやや停滞してきたが、一方小学生は87年から急激に増加し1990年では前年比11.6%増を示している。

非行に関しては、刑法犯として補導した件数が1983年(昭和58年)の123,247名をピークにこの10年やや実数においては停滞の傾向を示しているが、それは中学生総数の減少によるもので、指数(補導数/総数)では1978年(昭和53年)を100とした場合にここ10年は150%以上を続けており、ここでも近年の増加現象がみられる。

登校拒否と非行との関連性について1965年(昭和40年)以降の各年ごとの実数比較を行ってみると図1のように両者の間にかなり高い関連性が示される。つまり登校拒否の増加傾向と非行の増加とが何らかの関係によって一致($r \doteq .87$)を示していることを見逃すわけにはいかない。

この関連性が何を意味しているかに着目すべきである、しかしながら従来から登校拒否と非行は別々に切り離されて吟味されてきたのである。

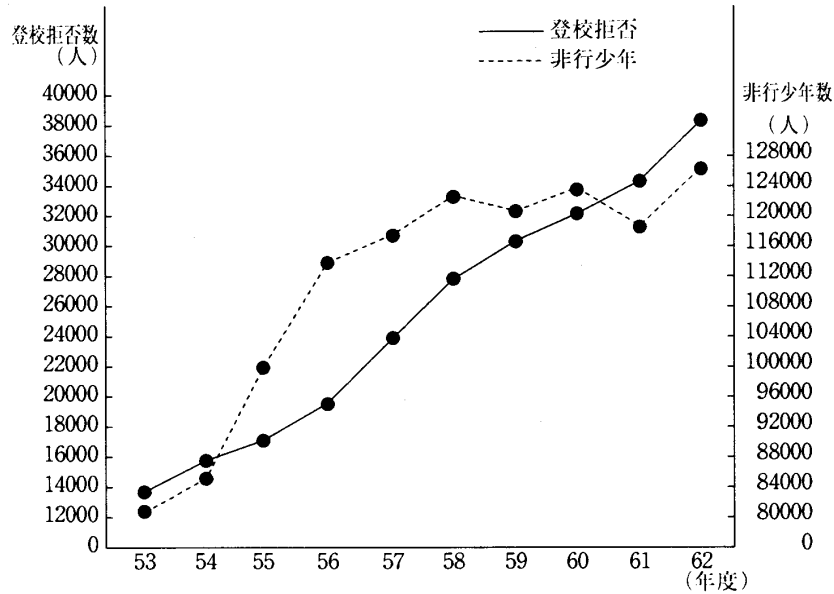


図1 登校拒否数と非行少年数の推移

登校拒否では、その規定概念が、最初は学校恐怖症(school phobia)から出発し Johnson らによって登校拒否と怠学を分けて考え、一種の神経症的メカニズムの中で考えられてきた。

以後登校拒否の規定はさまざまなかたちで行われているが、1969年に Berg が行った定義にも「盗み、虚言、徘徊、破壊などの重大な反社会的行為がない」ことを規定づけている。この考え方は、登校拒否は怠学、遊び、非行による不登校とは別のものであるという考え方を生み出し、特に精神医学の領域ではこの考え方が根強く定着しているといえる。

ところが近年の登校拒否(不登校30日以上)の実態を調べると、いわゆる学校恐怖症に該当する登校拒否(不安など情緒的混乱による)は小・中学生を合わせて25%に過ぎず、それ以外にいわゆる無気力型(勉学の気力を失って何となく登校しない)が28%、そして特に中学生では遊びと非行の型が20%と急増している。つまり分離不安型、甘やかされ型、優等生の息切れ型の心理的・神経症的な従来の登校拒否が減少し、小学生では葛藤が少なく悩まない、いわゆる「明るい登校拒否」が増加していること、さらに玉井らによって1964年に「学校恐怖症に非行などによる怠学は含めないことに多くの人は同意しているが、その限界はむずかしい」ことが指摘されている。

このような登校拒否に関する概念規定の混乱が教育現場および家庭において多くの問題を現実を生じつつあることは見逃せない。教育現場では登校拒否児童・生徒をできるだけ学校へ復帰させることが当面の目的であり、したがって担当の教諭はできるだけ当該の家庭と密に連絡をとり、当人の登校を促すべく努める。にもかかわらず親たちは専門家(精神科医およびカウ

ンセラーなど)との相談や指導により、登校刺激がかえって症状を悪化するとしてそれを拒否し、両者の間に断絶すら生じている。

また家庭内においても、初期には登校について熱心であった親が、ある時点から急に傍観の態度にきり変わるにより、当人は今までの心理的緊張から解放される一方である種の空虚で利根的な生活へとおち込んでいく。つまり無気力型は更に無気力感を増し、悩みなき安穏な生活をよしとした生活態度へと、また遊び・非行型はその日その日の気ままな享樂の世界へとおち込んでいく。親はこのような現状を専門家の「登校刺激はするな」を唯一のたよりとして、じっと耐えますます不安感を助長させるのである。

このような登校拒否の副次的な現象が昨今の臨床場面で多くみられるようになり、登校拒否の長期化へとつながっているとも考えられる。Galloway はいくらかの子どもは登校拒否と怠学や非行の両面をオーバーラップしてもち、その分類は困難ではあるが、しかし登校拒否に対応するためにはこの両者の鑑別は是非必要であると述べている。本人に対する登校刺激や家庭に対する学校からの登校勸奨は怠学や非行による登校拒否にはむしろ必要であることを指摘している。

登校拒否の中で、いわゆる心理的な恐怖症による欠席と非行による欠席の違いを見分けるのは Galloway も指摘するように難しい。Atkinson らは登校拒否児の欠席は連続ししかも長期にわたるが、怠学や非行によるものは散発的なのが特徴的であると述べている。また玉井は登校拒否の欠席は当人が学校へ行かないということが主症状であるために親も欠席を認識しているが、怠学や非行の欠席についてはむしろ学校からの連絡により初めて知ることが多いことを指摘している。しかしこの両者の区別も単なる欠席についての現象面からの弁別であり、登校拒否と非行の本質的な違いに触れてはいない。

登校拒否と非行の本質的な違いの比較研究がなぜ少ないのか。従来から登校拒否と非行とは、その概念もまたその成立過程も全く異質なものとして考えられ、それぞれ個別の研究の対象となってきた。登校拒否の発症がその主要因を当人の依存的なパーソナリティにあるのに対して、遊びや非行の主要因は当人の正否の判断力の欠如とそれを誘惑する社会的背景にその要因を求めている。

しかし近年の複雑に組織化された社会機構(学歴社会、入試の競争の激化)や情報過多と無統制な性情報の氾濫など、子どもの成長過程で決して恵まれているとは云えない現代の社会環境の中で、登校拒否や非行は今では「特異な子どもの特異な行動」ではないことを文部省も近年ようやく認めざるを得なくなった。「どの子にも起きうる」可能性として捉えるべきなのではないか。つまり登校拒否にしても非行にしても現代社会が作り出した子どもの特異な行動では

なく、あらゆる子どもに潜在的に認められる行動として考え、またその視点にたつて両現象の比較研究が今や求められる時期に至っていると考えられる。

I 登校拒否と非行の児童・生徒の学校生活における実態調査

目的

本研究は登校拒否児の実態調査をとおして、特に登校拒否に潜む「遊びや非行」との関連性の考察を主眼とする。従来から登校拒否には遊びと非行を入れないという概念規定や登校拒否と遊びや非行の考察が別個になされていたが、登校拒否の中に見えかくれする怠学や遊び、非行を実態調査で把握しようとするものである(登校拒否児と非行児の相違と共通性を担当教諭および養護教諭らのイメージ調査によって考察する)。さらに実態調査は首都圏と地方都市の小・中学校を対象とし、その差異も考察に含めることによってわが国の登校拒否と遊びと非行の特質をも考察の対象とした。

方法

調査の対象は以下の地域の小学校・中学校の教諭で現在クラス担任をし、しかも不登校児(一年間30日以上長期欠席)を1名以上有する者および養護教諭を対象としてアンケートによる調査を実施した。

アンケートは総務庁の平成3年度青少年白書^①および文部省の登校拒否(不登校)問題について^②を参考にして、不登校児の学校生活に関する意識と態度を調査する項目で構成した回答方法は、教師からみて当該児に該当するものに印をつける(事由の重複も可)というやり方で、同一の質問項目に登校拒否児に該当する場合は○印を、非行児に該当する場合は×印で区別した。

調査対象細目

		教諭数	担当の不登校児数	登校拒否児数
首都圏対象	小学校	29名	38名	
	中学校	58名	98名	
	計	87名	136名	109名
地方都市対象	小学校	31名	34名	
	中学校	63名	76名	
	計	94名	110名	100名
全体の合計	小学校	60名	72名	
	中学校	121名	174名	
	計	181名	246名	209名

登校拒否児と非行児の学校生活に対する意識と態度の関連性

結果

表1 登校拒否の事由による分類（分類は東京都教育研究所の分類による）

心理的理由によるもの

	首都圏 (109)	地方都市 (100)	合計 (209)
D-1 神経病的登校拒否	小学校 14	小学校 11	小学校 25
	中学校 36	中学校 31	中学校 67
	計 50 (57%)	計 42 (42%)	計 92 (44%)
D-2 無気力傾向	小学校 5	小学校 8	小学校 13
	中学校 17	中学校 25	中学校 42
	計 22 (25%)	計 33 (33%)	計 55 (26%)
D-3 遊び・非行傾向	小学校 2	小学校 2	小学校 4
	中学校 14	中学校 13	中学校 27
	計 16 (18%)	計 15 (15%)	計 31 (15%)

学業不振および学校への不適応によるもの（重複回答により実数のみ）

	首都圏	地方都市	合計
E-1 学業の不振(怠学)	小学校 6	小学校 8	小学校 14
	中学校 18	中学校 15	中学校 33
	計 24	計 23	計 47
E-2 教師への不適応	小学校 1	小学校 4	小学校 5
	中学校 2	中学校 6	中学校 8
	計 3	計 10	計 13
E-3 いじめや友人関係の問題	小学校 1	小学校 5	小学校 6
	中学校 16	中学校 15	中学校 31
	計 17	計 20	計 37
E-4 学則への不適応 および反発による	小学校 1	小学校 0	小学校 1
	中学校 2	中学校 1	中学校 3
	計 3	計 1	計 4
E-5 その他の理由	小学校 1	小学校 0	小学校 1
	中学校 7	中学校 3	中学校 10
	計 8	計 3	計 11

福 屋 武 人

表2 登校拒否のきっかけとなった事由（重複回答による上位群の実数のみ）

	首都圏	地方都市	合計
① 家族・家庭	55	42	97
② 子どもどうしの関係	35	27	62
③ 勉強（授事）	24	45	69
④ 学校の雰囲気	12	7	19
⑤ よくわからない	12	14	26
⑥ いじめ	6	7	13

表3 登校拒否児童・生徒の友人関係（重複回答による上位群の実数のみ）

	首都圏	地方都市	合計
① 団体行動に馴染めなかった	38	20	58
② 対象児の考えや行動が友人たちとの間にギャップがあった	35	38	73
③ 親しい友だちがつかれなかった	26	10	36
④ 対象児と友人の間に衝突があった	15	20	35
⑤ しばしばいじめに合うことがあった	10	14	24
⑥ 特定の友人の支配下にあった	7	16	23

表4 登校拒否と非行の学校生活での比較（重複回答による上位群の実数のみ）

	登校拒否	非行
① 登下校の時間がルーズであった	30	45
② 部活に参加できずにいた	27	14
③ 授業についていけなかった	26	5
④ 特定の科目が極端に悪い	19	35
⑤ 校則を守れないことがしばしばあった	13	29
⑥ 先生や友人から指導されることを極端にきらった	11	28
⑦ 学校の雰囲気について文句や抗議をすることがあった	5	19
⑧ 一見して身なりや服装がはで過ぎたり奇抜であった	5	25
⑨ 先生の注意を無視することがしばしばあった	4	18
⑩ 性的な行動がみられた	1	6

登校拒否児と非行児の学校生活に対する意識と態度の関連性

表5 登校拒否と非行の主な要因の比較

	登校拒否		非行	
	人数	割合	人数	割合
① 家庭	84	32%	83	32%
② 本人自信	71	27%	69	27%
③ 友人関係	42	17%	48	18%
④ 学校	31	12%	5	2%
⑤ 社会環境	10	4%	15	6%
⑥ 学歴社会	8	3%	25	10%
⑦ 教育制度	6	2%	7	2%
⑧ その他	8	3%	8	3%
	260	100%	260	100%

考察

以上のアンケートによる実態調査とアンケートに応じた現場の教諭のコメントなどから次のような登校拒否と非行の関連性が考察される。

- 1 登校拒否の事由の分類から、遊び・非行傾向によるものが心理的理由の全体の15%（首都圏18%，地方都市15%）もいるということは登校拒否と非行はある特定の子どもにとってオーバーラップするものであり、登校拒否から非行を全く除くことができないことを示している。

さらに学業の不振(怠学)をもその事由に加味して考えるならば、近年の登校拒否の実態はかなり複雑な要因から成り立っていることが予測される。

- 2 登校拒否の契機の事由の分類から現場の教諭のあげる最大の要因は家族・家庭が全体で最も高い値を示し、学校の生活に関する事由は少数となっている。しかし無視できないのは子どもどうしの関係およびいじめで、この両者は何らかの意味で登校拒否児童・生徒が友人から疎外された人間関係の実態を露わしているといえよう。

- 3 登校拒否児童・生徒の友人関係の軌轢をもう少し詳しく考察すると、対象児の考えや行動が同輩の友人たちとの間にかなりのギャップがあるために、親しい友人が作れず団体行動にも馴染めず孤立状態をよぎなくされるばかりか、友人との間に衝突があったりしばしばいじめに合うとか、力ある友人の支配下に拘束されるなど、個の人間として屈辱的でギクシャクとした状態にあることを伺い知ることができる。かかる友人関係の中では対象児は学校から飛び出すか、あるいは学校へ行かないという状態をよぎなくされても不思議ではないといえる。

むしろこの友人関係の拙さが登校拒否児童・生徒のすべての要因ではないが、個として人間形成以前の幼少年期の体験としては心理的に大きな疎外感を抱かせる要因になることは間違いがない。この疎外感はやがて成長するにつれて人間不信感や対立的感情を助長させ、反社会的行為へと屈折していく場合もある。

- 4 学校生活において担当教諭の目から登校拒否の児童・生徒と非行の児童・生徒との差異をどのようにとらえているか、これは彼らの日常行動を知るうえにも重要なヒントを与えるものと思われる。

まず登下校の時間が守れない、身なり服装がはでである、校則が守れないなど学校生活での基本的な規則や活動を守ることや参加することができず、学校生活に不適應を示している点では両者とも同じ傾向を示している。しかし同じ不適應でも非行児童・生徒は先生や友人からの指導を嫌い、学校の雰囲気についての文句や抗議を行い先生の忠告を無視するなど積極的拒否の態度が見られるのに対して、登校拒否児童・生徒の消極的拒否との間に差異が認められる。また学習においては登校拒否児童・生徒は部活に参加できない、授業についていけない、特定の科目が極端に悪いなどの能力不足を示しているのに対して、非行児童・生徒の場合は部活に積極的に参加することができ特定の科目が極端に悪くても授業についていけないという能力不足によるものではなく、むしろ怠学による学力の不足が起因していることを示している。

- 5 登校拒否と非行の主なる要因の比較に関しては、現場の教諭はその差はほとんど認められないとしながらも、登校拒否に関してはその要因の一つに「学校」を挙げているのに対して、非行の場合は「社会環境」を挙げ、そこに有意差が認められる。
- 6 登校拒否と非行についての相互関係の有無については、首都圏の教諭および地方都市の教諭ともに「わからない」が半数以上を占め、現場教諭においてもその実態を把握しかねているといえる。それは非行にくらべて登校拒否の概念規定がまだ明確化されていない部分の多いためでもあり、しかし全体の1/4が「関係あり」を認めているのは見逃すことができない。
- 7 最後に登校拒否と非行の実態について、首都圏と地方都市の比較で僅かな差異は認められても全体的な傾向として、極めて類似的であり総括して本調査はわが国の実態を表しているとみることができよう。

Ⅱ 登校拒否児と非行児の学校生活での意識・態度の関係

目的

冒頭の「はじめに」でも述べたように、我が国の近年の登校拒否と非行の増加傾向、およびその質においても相互に何らかの近似性が見られるのではないかという仮説にもとずいて本研究の調査が始められた。

つまり近年の長期化する登校拒否は、初期には神経症的な学校恐怖の症状を呈するものの、やがて慢性的に至って心理的には登校への圧迫感から逃れ、その日その日を無為に過ごし刹那的な傾向へと移行する児童・生徒が増加しつつある。この傾向は従来の登校拒否にも見られた過程のひとつであったが、臨床的には無気力化はむしろ登校拒否に対する心理的な緊張の反動(一種の登校拒否への飽き)の現象であり、それを契機に快方へと動きが見られる場合が多いと思われた。

しかし近年の無気力化現象は、従来の登校拒否の心理過程とはやや異なり、長期化しながらさらに当該児の関心は学校へは向けられずむしろ脱学校化への傾向を示しつつある。例えば昼間は家で無為に過ごし夜になると巷に刺激を求めて彷徨いあるく。あるいは学校から逸脱した者同志で連絡をとり合い、原宿や新宿においてグループ化し、とりとめのない無目的な行動で一夜を過ごす。そこでは学校生活という生活のリズムは崩壊し、彼ら独自の生活リズムの中に身を置くことで一種の仲間意識を作り上げようとしているかのようであり、不良グループの仲間意識のようにある種の連帯感を作り上げているかのようである。

以上のような近年の登校拒否の傾向に対して、学校現場では登校拒否と非行児童・生徒について担当教諭達はどのような認識をもち、どのように対応しようとしているのか、この問題を考察するのがこの章の目的である。

ちなみに、本研究の調査にはいる前に「登校拒否児と非行児の学校生活における意識・態度の間になんらかの関連があると思われるか」という調査を行ったが、その結果は以下のとおりである。

登校拒否と非行間の相互関係の有無について

	N	%
A:あると思う	52	28.7
B:ないと思う	42	23.2
C:わからない	86	47.5
D:回答なし	1	0.6
合計	181	100.0

以上の結果をふまえて当該児たちの、学校生活における具体的な意識・態度について、アンケート調査を行った。

結果

表6 登校拒否児と非行児の意識・態度の印象比較（重複回答による）

	登校拒否児童・生徒		非行児童・生徒	
	N	%	N	%
A 自制心の弱さ	18	5.0	14	4.9
B わがまま	33	9.1	20	7.0
C 自己中心的	24	6.6	18	6.3
D 甘え	33	9.1	7	2.4
E 持久力の欠如	39	10.7	15	5.2
F 衝動的	7	1.9	20	7.0
G 不幸福感	8	2.2	4	1.4
H 愛情欲求	19	5.2	7	2.4
I 自己表現力の弱さ	33	9.1	2	0.8
J 快楽的	4	1.1	25	8.7
K 判断力の欠如	14	3.9	18	6.3
L 嫌なことを避ける	37	10.2	18	6.3
M 親に対する不信感	18	5.0	14	4.9
N 対人関係の拙さ	22	6.1	8	2.8
O 劣等感	26	7.1	16	5.6
P 感情の起伏が激しい	13	3.6	24	8.4
Q 自己自罰の感情	3	0.8	4	1.4
R 権威に対する反抗	3	0.8	18	6.3
S 復しゅう意識	4	1.1	16	5.6
T 短絡的	5	1.4	18	6.3
合計	363	100.0	286	100.0

考察

登校拒否や非行の児童・生徒が学校生活で示す意識や態度について、担当教諭がどのように観察し、印象として受けとめているかをアンケートによって調査した。その結果が表5および表6であり、それぞれの質問項目についての重複回答によるものである。

概略的には両者の意識・態度についての印象はほとんど類似しているといえるが、微妙な点で差異も認められる。その差異を明らかにするために両者の印象の相互関係を図式化したのが図2である。それぞれの項目について登校拒否および非行のそれぞれの軸の関連性を調べると、

登校拒否児と非行児の学校生活に対する意識と態度の関連性

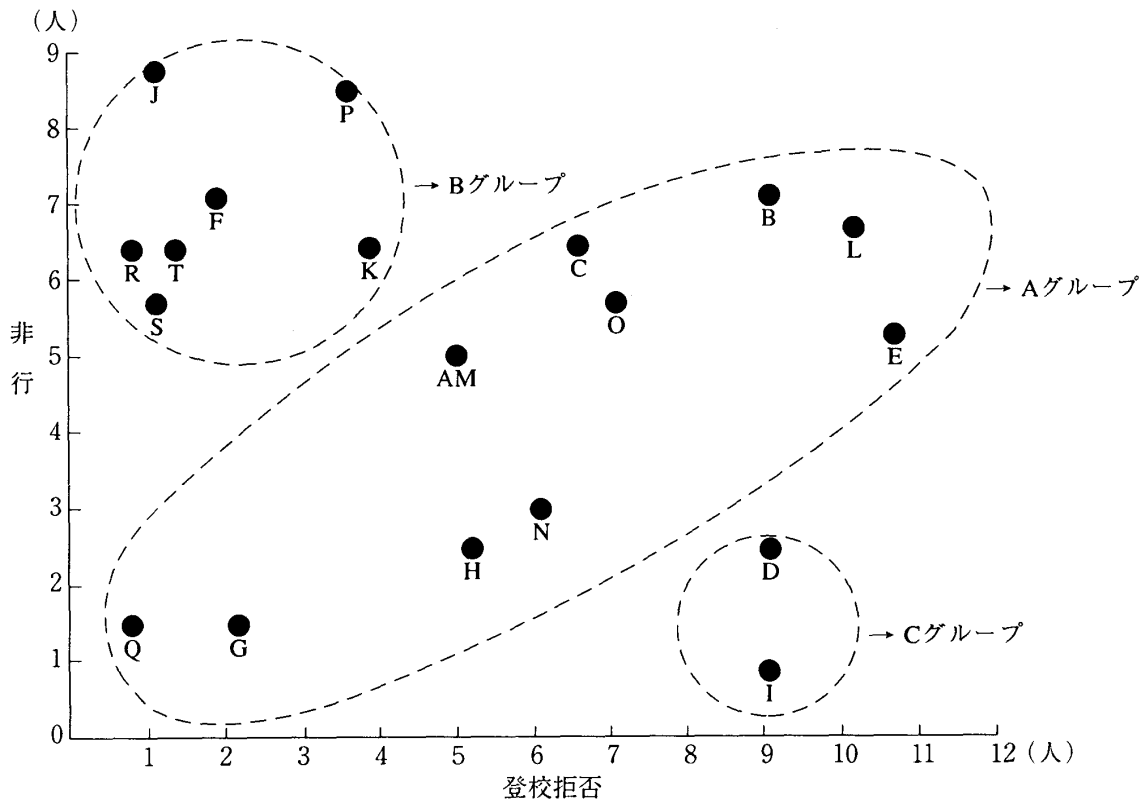


図2 当該児の性格や感情の印象について登校拒否と非行との相互関係図 ($r = -.17$)

その分布はランダム分散で、一見では相互関係がないようにみられる ($r = -.17$)。

しかし各項目ごとについて検討すると、図2の分布は点線で囲まれるように次の3つのグループに分割される。まず登校拒否と非行の性格や感情の印象が極めて類似している項目のグループ(Aグループ)で、その相互関係は $r = .89$ でしめされる。図2の相互関係図は、このAグループによって他の残りの項目が次の2つに分割される。その一つが非行軸に近いグループ(Bグループ)であり、非行傾向が高く、登校拒否傾向の弱い項目グループとなる。他の一つは登校拒否軸に近いグループ(Cグループ)であり、登校拒否傾向が強く、非行傾向の弱いグループである。

以上3つのグループの項目を検討すると、それぞれのグループの特徴が顕著になる。Aグループは項目A, B, C, E, G, H, L, M, N, O, Qから構成され、内容的には自己中心的で愛情欲求が強く、自己を制御する力に欠け、嫌なことからは逃れようとする社会生活への対応の未熟さと、一方では教師・友人らとの対人関係の拙さや、親に対する不信感に加えて不幸感や自己自罰の感情といった劣等感が錯綜する登校拒否児や非行児に共通する特有の内閉的

で外罰的な性格特性といえる。彼らは学校という集団生活にはなかなか適応しがたい孤立的なタイプの生徒として印象づけられる。

次にBグループは項目F, J, K, P, R, S, Tで構成され、内容的には衝動的、快楽的、短絡的で感情の起伏が激しいといった不安定な性格と判断力の欠如、権力に対する反抗、復讐意識などの非社会的行動に特徴づけられる。学校生活では教師からは指導しにくい反抗的なタイプの生徒として印象づけられる。最後のCグループは項目ではD, Iと少ないが、しかし内容として甘えや自己表現力の弱さといった依存的な幼稚性の性格特性で、母子分離不安による登校拒否の印象を抱かせる。

相互に関係がなさそうに見える登校拒否と非行の児童・生徒の性格や感情も、教師の目からは以上のような3つの類型で把握されていることが理解される。ここで特に注目したいのはBグループについてであり、つまり非行傾向の軸に偏りをもつ社会的権威に対する反発傾向についてである。従来では恐らくこの傾向については学校の中ではむしろ潜在化していたであろう非行児の行動特性だが、現在では教師の目から見てもかなりの実数として揚げられるように顕在化しており、しかも登校拒否児の中にも少なからずいるという事実である。現在の児童・生徒にとって学校は必ずしも楽しいところではなく、むしろ校則や権威によって拘束されているという圧迫感が不登校の引き金となり、しかも長期化の傾向の要因となっているのではないだろうか。

Ⅲ 登校拒否児と非行児の性格特性の比較

目的

近年の不登校児数の増加傾向が、単に学力不足や学校生活への不適応によるものというだけで解決されるものでないことは前説Ⅰ・Ⅱの実態調査からもある程度理解される。彼らの中には学校生活に対する反発、つまり味気ない授業内容や点数偏重の評価に対する批判、厳しい校則、教師・友人たちへの反発などによって、自らの意志で不登校の道を選び、自らが非行へと脱線していく子供も少なからずいることを見逃すわけにはいかない。むしろ不登校の児童・生徒の中でこのような傾向が増加しつつあるとも云われている。

このような傾向が近年の登校拒否と非行の発生原因を分かりにくくしているのではない。前説でも述べたように、登校拒否と非行間の相互関係について、我が国の小・中学校の教諭のうち、調査対象の半数近くが「わからない」と答え、また「あると思う」が30パーセント近くを占める現状は児童・生徒の学校生活に対する意識・態度に見え隠れする当該児たちの「学校

ざらい」をどのように解釈し対応したらよいかという戸惑いを見る。

「学校ざらい」は、むしろ現在の学校の教育のあり方や子供たちへの対応の仕方に起因するものだが、それのみでは解決できない多くの問題を含んでいる。現に大部分の児童・生徒が現状の学校生活に適応している訳で、たとえそこに不満や負担を感じているとしても不登校にまで至らない。それでは当該児のみがどうして登校拒否とか非行という具体的な行動となって現われるのか。そこに「一般児」とは異なる当該児固有の素因を考えねばならない。

本研究では、その素因の一つとして当該児の性格、しかも担当教諭や養護教諭が学校生活での日常から観察した登校拒否児と非行児の性格特性についての報告を参考にして、その特徴を考察することを目的としている。

方法

第三者(教諭)が当該児(登校拒否児および非行児)の性格を評価する際に最も妥当な方法として「生活感情尺度」を少し修正して用いることにした。本尺度は矢田部・ギルフォード性格検査とかなりの高水準で妥当性をもち、しかも斉藤耕二^③らによって既に青少年の性格として情緒的安定性、対人的協調性、生活感情充実性の因子コンセプトが検証されている。

調査尺度は30項目の形容詞対の質問からなり、7段階評価でウェイトづけされる。本尺度を先の小・中学校教諭および養護教諭181名にアンケート形式で実施し、その結果をSD法によって処理した。

結果

調査尺度を調査対象群に実施して、その得点を各項目ごとに登校拒否および非行について主成分解析を行い、寄与率3パーセントをこえる項目でバリマックス法回転を行った結果が、それぞれ表7および表8である。

表7 登校拒否児の性格特性

番号	質問項目内容	M	SD	I	II	III
Q 1	孤独な—仲間が多い	2.50	1.03	.64	.19	.23
Q 2	依存的である—指導的である	2.66	1.40	.30	.48	.40
Q 3	へだたりがある—うちとけている	2.87	1.41	.62	.25	.06
Q 4	頼りにならない—頼りになる	2.98	1.41	.26	.78	.13
Q 5	冷たい—暖かい	4.05	1.15	.45	.16	-.04
Q 6	不安定な—安心した	2.41	1.24	.58	.44	-.14
Q 7	おちつかない—おちついた	3.71	1.30	.29	.51	-.42
Q 8	激しい—おだやかな	3.97	1.38	.47	.33	-.56
Q 9	病的な—健康的な	3.00	1.21	.56	.24	.19
Q10	無気力である—気力がある	2.91	1.21	.54	.51	.10
Q11	騒がしい—静かな	5.06	1.21	-.34	.01	-.62
Q12	弱々しい—しっかりしている	3.22	1.21	.28	.69	.11
Q13	無個性な—個性的な	4.22	1.49	.11	-.01	.68
Q14	疑い深い—信じやすい	3.34	1.32	.69	-.03	-.35
Q15	不調和な—調和のとれた	2.87	1.20	.55	.32	.11
Q16	悲観的な—楽観的な	3.08	1.42	.54	.30	-.13
Q17	暗い—明るい	3.17	1.21	.79	.25	.25
Q18	苦しそうな—楽しそうな	3.14	1.21	.72	.11	.01
Q19	むなしい—充実している	2.98	1.14	.48	.60	-.14
Q20	後向きな—前向きな	3.07	1.14	.65	.43	-.09
Q21	夢がない—夢を持っている	3.50	1.14	.36	.24	.16
Q22	不満げな—満足気な	2.82	1.15	.62	.31	-.32
Q23	挫折的—成長的	3.34	1.30	.32	.67	-.11
Q24	年寄りじみている—若々しい	3.55	1.04	.54	.12	.20
Q25	大人びている—幼稚である	3.78	1.56	-.07	.71	.04
Q26	閉鎖的—開放的	2.61	1.13	.78	.08	.22
Q27	無計画である—計画的である	3.08	1.26	.14	.69	.08
Q28	対立的である—協力的である	3.90	1.13	.68	.07	-.19
Q29	主張がない—主張する	3.89	1.52	-.09	.28	.52
Q30	現実を否定的—現実を肯定的	3.32	1.52	.47	.46	-.10
	T	99.06	38.04	12.93	10.19	.28
	M	3.302	1.268			

登校拒否児と非行児の学校生活に対する意識と態度の関連性

表8 非行児の性格特性

番号	質問項目内容	M	SD	I	II	III
Q 1	孤独な—仲間が多い	3.67	1.41	.50	.17	.16
Q 2	依存的である—指導的である	3.00	1.47	.07	.20	.69
Q 3	へだたりがある—うちとけている	3.13	1.55	.48	.26	-.14
Q 4	頼りにならない—頼りになる	3.18	1.47	.33	.25	.54
Q 5	冷たい—暖かい	4.08	1.47	.50	.26	-.44
Q 6	不安定な—安心した	2.05	1.11	.65	.43	.02
Q 7	おちつかない—おちついた	2.33	1.11	.56	.45	.03
Q 8	激しい—おだやかな	2.58	1.25	.50	.58	.04
Q 9	病的な—健康的な	3.67	1.34	.63	.10	.18
Q10	無気力である—気力がある	3.20	1.44	.58	.42	.23
Q11	騒がしい—静かな	2.02	1.23	.03	.38	-.15
Q12	弱々しい—しっかりしている	3.28	1.23	.52	.10	.51
Q13	無個性な—個性的な	4.55	1.50	.41	.01	.59
Q14	疑い深い—信じやすい	3.33	1.53	.41	.37	.04
Q15	不調和な—調和のとれた	2.31	1.08	.39	.58	.08
Q16	悲観的な—楽観的な	4.33	1.78	.54	-.08	-.20
Q17	暗い—明るい	4.08	1.48	.81	-.06	.27
Q18	苦しそうな—楽しそうな	3.54	1.48	.78	-.01	.04
Q19	むなしい—充実している	2.74	1.07	.68	.23	.08
Q20	後向きな—前向きな	2.72	1.17	.53	.51	.04
Q21	夢がない—夢を持っている	3.26	1.61	.18	.62	.27
Q22	不満げな—満足気な	2.38	1.23	.63	.53	-.13
Q23	挫折的—成長的	2.85	1.39	.37	.69	.03
Q24	年寄りじみている—若々しい	3.89	1.16	.54	.21	.49
Q25	大人びている—幼稚である	2.76	1.36	-.03	-.02	.62
Q26	閉鎖的—開放的	3.56	1.50	.72	.28	.21
Q27	無計画である—計画的である	2.23	1.05	-.24	.70	.17
Q28	対立的である—協力的である	2.85	1.04	.44	.49	.08
Q29	主張がない—主張する	4.71	1.45	-.16	-.08	.62
Q30	現実を否定的—現実を肯定的	2.97	1.37	-.03	.79	.02
	T	95.25	40.33	12.32	9.36	5.87
	M	3.175	1.344			

登校拒否および非行の因子分析の結果から、それぞれの因子群間に何らかの関連性があるように思われる。そこでリグレイ指標 (Wrigley's index) によって両者の因子間の相関係数を調べると以下のとおりである。

登校拒否のⅠ群と非行のⅠ群間	.92
登校拒否のⅡ群と非行のⅡ群間	.46
登校拒否のⅢ群と非行のⅢ群間	.82

上記の結果から登校拒否と非行の各因子は相互に関連性をもちながらも、登校拒否の第2因子と非行の第2因子の項目内容に微妙な差異が認められる。

考察

登校拒否と非行児童・生徒の性格特性を、担当教諭が客観的に捉えたイメージから質問項目に答えて貰い、そのデータに基づいて因子分析を行った。その結果から両者ともに3因子ずつ抽出した(5因子解析も行ったが、3因子の方が妥当のように思われる)。

それぞれの因子の項目内容から、斉藤らが検証した因子コンセプトが最もよく当てはまると考えられ、第Ⅰ群の因子を情緒的安定性、第Ⅱ群の因子を生活感情充実性、第Ⅲ群の因子を対人的協調性のコンセプトと考えた。この内リグレイ指標により登校拒否と非行の間では、第Ⅰ群と第Ⅲ群、つまり情緒的安定性と対人的協調性の因子間には高い相関性をもつことがわかった。それに対して第Ⅱ群、つまり生活感情充実性の因子においては、登校拒否児と非行児にやや差異があると考えられる。

具体的に第Ⅱ群の因子項目について検証してみると、両者が共通する項目はQ23：挫折しようとしている、Q27：無計画であるの2項目のみで、残りは登校拒否児においてQ2：依存적である、Q4：頼りにならない、Q7：おちつかない、Q12：弱々しい、Q19：むなしい、Q25：幼稚である、といった情緒面での「未成熟による不安定性」が、そして非行児においてはQ8：激しい、Q11：騒がしい、Q15：不調和な、Q21：夢がない、Q28：対立的である、Q30：現実を否定している、という項目による「衝動的な不安定性」がイメージとして捉えられていることが分かる。同じ情緒的不安定でも、その質の差異が認められる。

目的で述べた近年増加しつつある学校嫌い(学校生活への反発)による不登校は、登校拒否児の場合は、本人の未成熟から勉強や校則などへの不適応を生じた為、また非行児は学校生活という枠組みに押し込められることに対する衝動的な反抗として生じるものと考えられよう。

引用文献

- ① 総務庁青少年対策本部編 平成3年度版, 青少年白書, 大蔵省印刷局, 1991
- ② 文部省初等中等教育局編 登校拒否(不登校)問題について, 文部省, 1992
- ③ 依田新編 現代青年の人格形成, 金子書房, 1970

参考文献

- ① 内山・筒井ら編 登校拒否・不登校, 同朋舎出版, 1990
- ② 東京シュレー編 学校に行かない僕から学校へ行かない君へ, 教育資料出版会, 1991
- ③ 安香・中里ら編 非行少年の心理, 有斐閣親書, 1979
- ④ カリア, コルシニー著 (沢田慶輔監訳), 学校カウンセリングの実際, 誠信書房, 1991